

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は青年期の先天性心疾患患者の自立を、疾患管理の自立と心理的自立という観点から取り上げ、それらに及ぼす要因とその影響メカニズムの解明をモデルの検証を通して行ったものである。先天性心疾患はかつて成人になるまでに死亡する疾患であり、過保護な養育が特徴とされてきた。しかし医療の著しい進歩により、現在では成人以降の生存が一般的なものとなり、成人後の生活の自立が重要な課題となっている。しかし、幼少期の保護的な養育の中で患者自身の自立意識は弱く、また青年期以降も小児循環器科に通うなど成人循環器科への医療移行も十分ではないことが医療者より指摘され、特に患者による自立的な「疾患の自己管理」の確立は世界的に重要な課題となっている。そこで本研究は、青年先天性心疾患患者の自立に影響する要因を、疾患の自己管理と親からの心理的自立という二つの側面から明らかにし、患者の自立支援の手だてを提案しようとする。こうした研究は独創的で、医療的支援や教育的支援の基礎として発達心理学の貢献を示す意義のあるものである。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

小・中学生患者の疾患理解等に関する半構造化面接による質的研究、中学生から社会人までの患者および健常青年との質問紙による量的比較調査を行っている。医師や看護師などによる医療領域の研究は事例研究に傾きがちであるのに対し、本研究は自立の構造モデルを設定し、多量のデータ収集と多変量解析によるモデル検証を行っており、明確で客観的な結論を下すことができおり、妥当なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

面接法では説明と同意に配慮し、プライバシーを守りながら個人面接を行った。またその結果は質的データとして適切に分析されている。質問紙データは匿名化された形で、病院、中学校、高等学校及び大学教員の協力のもとで同意を得た上で収集され、コーディングによりコンピュータに入力された後、因子分析、重回帰分析、多母集団同時分析などの多変量解析法、また分散分析、 t 検定、 χ^2 検定など適切な手法で分析された。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

考察はデータに基づいて行われている。結論はデータをもとにした適切なもので、飛躍のない妥当なものである。また本論文の基盤として、日本小児循環器学会の「日本小児循環器学会雑誌」、日本小児保健協会の「小児保健研究」の査読論文、また査読はないが千葉大学教育学部紀要で1つの論文が公刊され、学術的にも評価を得ており学術的に高い水準にあると言える。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は従来ほとんど検討されてこなかった先天性心疾患患者の「自立」の心理的メカニズムのモデル構築と多くのデータによる検証を行った。「疾患管理の自立」と「心理的自立」は年

年齢が上がるにつれ正の関連を示すこと、「疾患管理の自立」には「親の疾患管理への関与」と患者自身の「疾患理解」が関連すること、健常者と比較して「心理的自立」では特に男性の自立意識が乏しいこと、また患者では親とのポジティブな関係が自立に正の影響をもつことを示し、想定モデルを確証した。この成果は、青年期の自立に関する発達心理学研究はもとより、先天性心疾患患者の心理発達研究として国際的に意義のある研究であり、またおよそ100人に一人とされる先天性心疾患患児が通う教育現場における自立支援にも示唆を与えるものであり、「博士（教育学）」の学位が適切である。